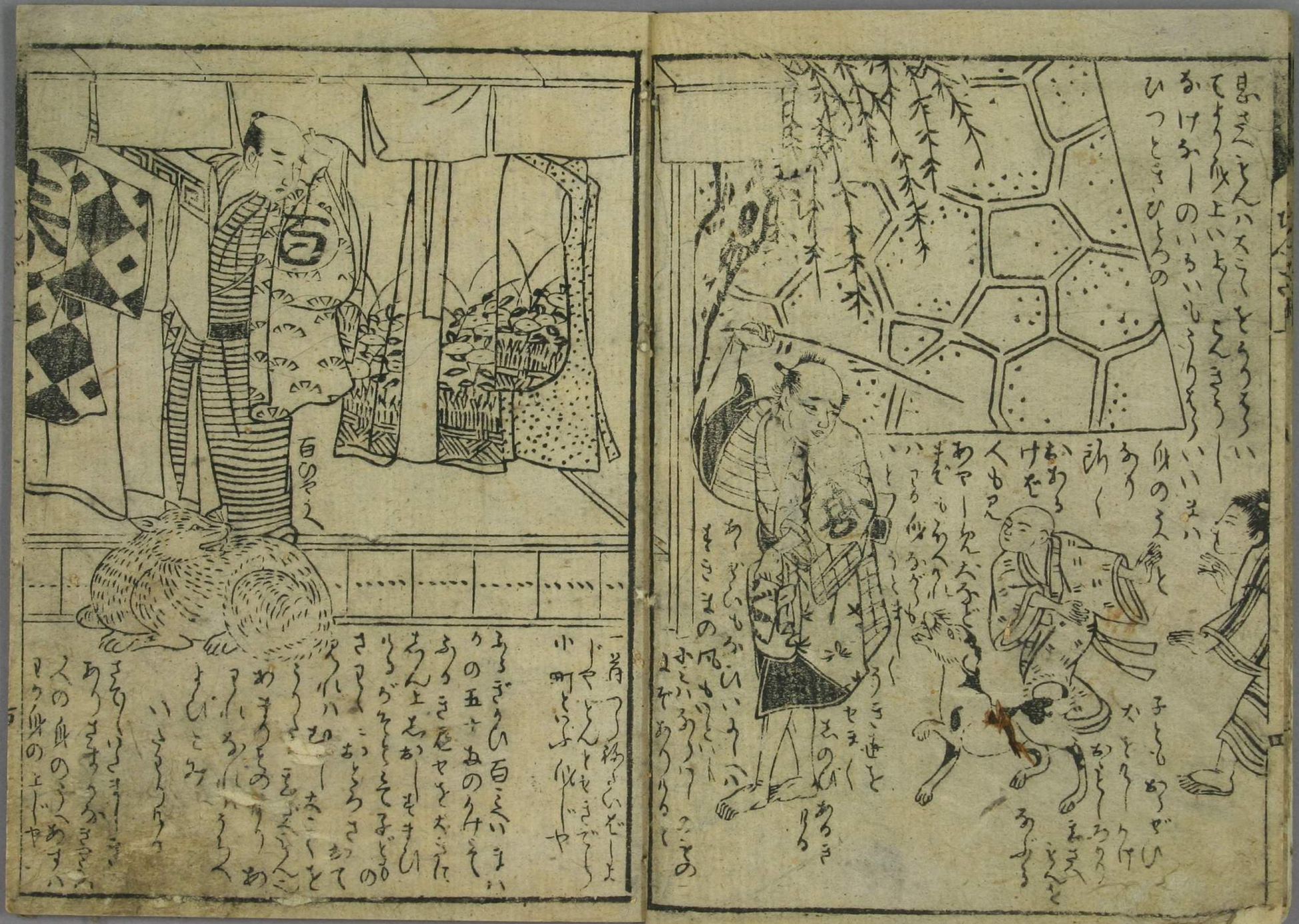
甚左紅絹由來 上

へ13
2946
194

194
特
へ13
2946
194

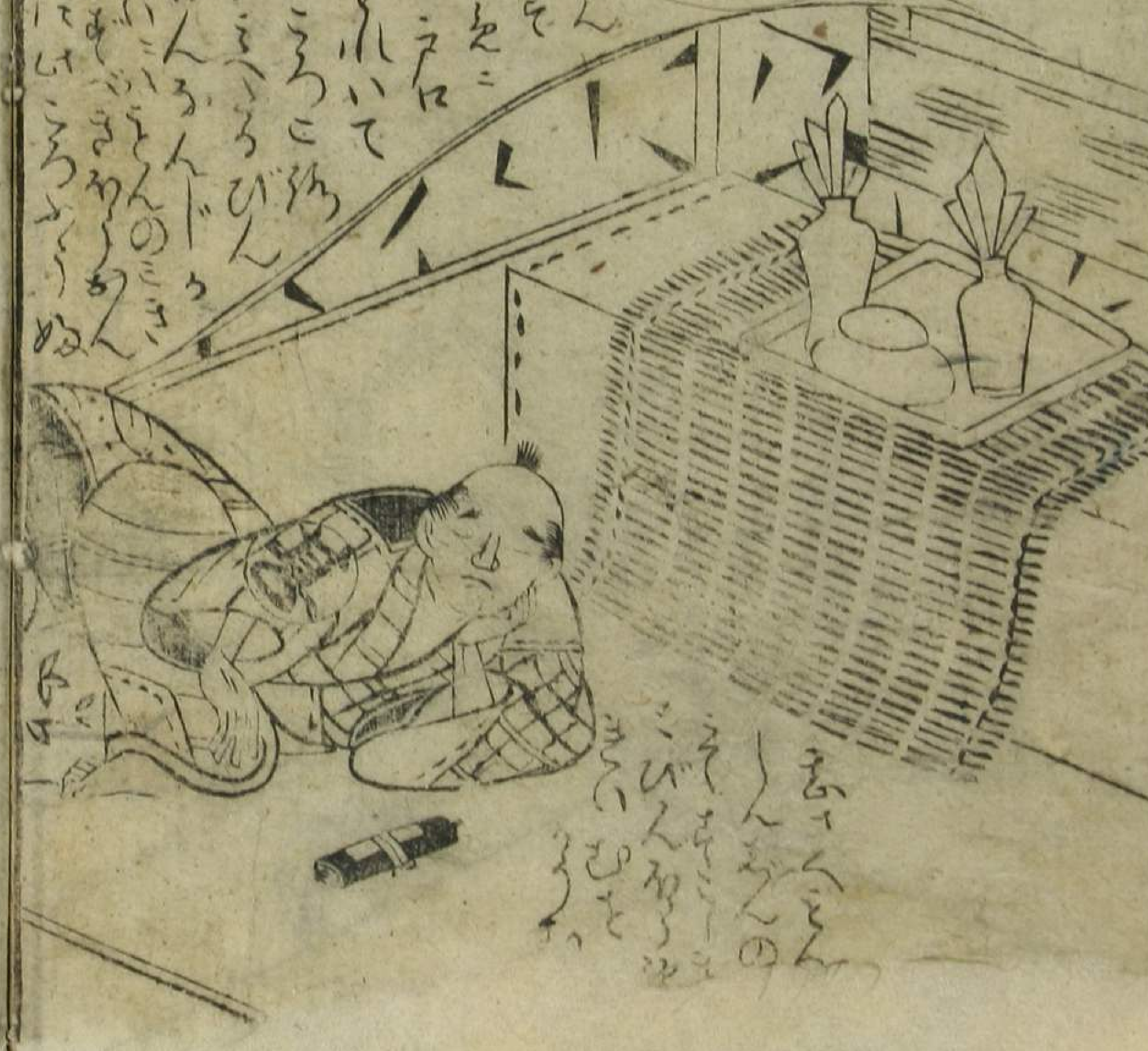


百のやく

吉
甚

論語こゝ沿てうハ

玄さくとんがしぬきんじん
のわまりおもしろつられそ
こしまとろここち出きに
いせんやどりのときこ戸口
にえへたる老人あつまりいて
ぜんざいく秋もうれしこうこ給
ひりにあつまりしてまことたるびん
かうう神るあつりぞ孫んるんどう
ふしにあうとえどもついにきんのこき
もうけそよ川かうかすざきかうあん
のうけもなしまちるにはころふくうぬ



さんやいをぬきんじいのこようその
しんざんとうしうくとうくひちう
のかしさとちしなんとしくふかく
を
今くん
のうき
けとさ
づるあいざ
うれをみて
ここうこなし
うれもそなまらきぬをみのそうえやまう
あくりかんとみいそのそえもいむづかしく
してさやあくかしうさしいまおんにおいしゆう
ところはさぬきみのそえんやまかりしく
是ちうにはし老人あいどりあまい孫くよく
のちうんとをそろくかさつけてぞうろう
なうかれこびんをさするのまずるひあうふ
まずおいや川ずんの夜ざしさをこれに
そうじとおしそかふみとようそ
きうとくそし犬をけしうやみそざし
きの内をまみくまてさかするうを

ときもおちう
そうおもさる
よさこちうら
ともくやに
しはつかに入るか
やきこそとその
入てよくかさをしまうの
そいつまい前をくしの
ときうきへまそへし
さは見てびんかうそのかう
びしとうせの夜はさかんに

帳

帳

染物所

長左ヱ

名代一膳
ふたりとんだのしまいろ
ふたりはえどゆめ上ぶぎょうなりけれバ
わかくの木をしんぞうせちゝとなのしまるゝす
ふたりはたいこもちとあるゝ
そのいぜんアやうくいやの
ミセをそうしてゝうしろ
ふたりはたいこもちとあるゝ
大のえいはゝまいどゝてさゝ
をうすハ
あふをとゝおうしぬ
ゆのかせとゝ
ゝつゝりうえ
いんこいうしさま
わ色とのとゝ
とさよハあ
ゝとんちゝえん

そこへハ
ろぐと山
たうくの
さいかで
ざるとハ
のきか
くう
ざんの
でまし
上まちゆう
あくへヤ
いせヤ
万ハ
そのいみハ
そこそこくの
ふせゼさり
うてげあう
ござるいまハ
かしこうる
身のうく
よろこんで

まことんハ六十余弥人のもろぢぐのあんきとしに
りきこうとくの身となりてもひと
ひんがく神のろごとなりと
右の画をうをひやうじて
えこうでんとなりぐおきあき
ゆふしんぞんーさうろ

まことに吉凶ハあざなふ
なりのとく六十きの凶も
老こいろうて大吉となるり天ぬ
同年ハ盛ハ
一生ハ吉もとろふ

凶吉とあるハ
易ニ曰く
吉凶悔
吝とも
なぐ
なり